小谷部、森川両君の手紙（一）

望月達夫

年に二回ぐらいの針葉樹会々合ではあきたらないと、久保孝一郎君の肝煎りで、二木会なるものが毎月第二木曜に開かれるようになった。その第二回目にあたる五月十四日の二木会で、今年の十一月二十八、九日に小谷部全助君の追悼山行を、どこか白峰北岳のよく見える処ででもやりたい、という提案が出され、皆さん異議なく賛成したが、彼と同期の私としては、それならどうしても一肌ぬがなくては…と深く肝に銘じた。と同時に、その際、同年代の森川真三郎君や鷹野雄一君の追悼もあわせてやりたいと私は附言しておいた。

ところで、その時私の胸に浮かんだことは、長いこと私の手許にあって、一度は浄書したこともある小谷部の手紙である。若し発表するなら本会報が最適だろうが、果して今の若い会員諸兄に興味をもって貰えるだろうか、という気もおきてそのままにしてあった。が、私でも居なくなれば、不明の儘埋もれてしまうことも考えれば、活字にしておくのも無意味ではなかろうと思って、ここに一括かかげることにした。昭和八年から十六年の間の二十五通だが、最初の一通は「小谷部のハガキから」として本会報復刊十四号（一九六六年八月刊）に出したことがある。

また森川君の手紙については本会報復刊九号（一九六四年十二月刊）に載せたことがあるが、偶々もう一通私の手許で見出したので、これもここにかかげることにした。

小谷部、森川両君の三十三回忌にあたって船本文治君が書いた「小谷部、森川両氏の年忌に憶う」（本会報復刊四十九号、五十号所収）から私は、戦争中の両君の消息を初めて知った。

小谷部が生前愛用した山内のピッケル一本と、「山日記」二冊が、いま私の手許に保管してある。これらも将来のことを考えて、永久保存のできる処へおさめたいと思っている。両君共に今さら説明するまでもなく、わが国登山史上の人であり、一橋山岳部の黄金時代を作った連中だった。

なお小谷部については左記の文献があることを附記しておこう。

- 佐谷健吉「我が心の師　小谷部全助－日本登山思潮史ノートー」（「岳人」二十三号、一九五〇年三月刊）
- 吉田二郎「小谷部全助ノート」(1)～(4)（「山と溪谷」二三九～二四二号、一九五九年四月～七月刊）

○昭和八年七月二十二日消印　品川区大井元芝八四九より（甲斐駒のエハガキ）

暑中御見舞申上候

待望の山生活は実に愉快だったでせう。僕

も十二日夜行で南アルプスへ這入り、駒・仙丈・白峯・鳳凰の諸山を探勝致しました。風雨に降り込められたり等して、帰京したのは二十日の夜でした。大樺沢の雪渓へ迷ひ込んだりして相当苦しい体験も嘗めました。

では又、左様なら

○昭和十年七月三十一日付　品川区大井元芝町八四九より（ハガキ）

先日は失敬、常念の方は如何でした、嘸暑かった事と思います。あれから小林、森川、鷲崎、佐々木、小柳は六人用を持って潤沢生活へ行き、又僕と斎藤正治とは錫杖から槍平の方へ出掛け、共に快晴に恵まれてしみじみと山の好きを堪能する事が出来ました。去る廿九日思出多い上高地を後に一同天幕をたたんで帰京、天幕は改良、修繕の為一応東京へ持帰りました。では奥さんによろしく、さようなら

○昭和十年九月八日付　西宮市外甲東村神呪洲崎方より（封書）

拝啓　気候不順貴兄には如何御暮しと案じ居ります、小生無事同封の記録の如く長い山生活を了へ、唯今関西に羽を休め居ります故御安心下さい、今回のカクネ生活は天候に恵まれませんでしたが、張切って愉快な登攀を味ふ事が出来ました、委細鷹野達から御聞きの事と存じますが、何れ近く拝眉の節に譲ります、こちらには参考に致したき文献も無之、原稿は遅々としてはかどりませんが、大体骨筋位はまとめて置きます、カクネや大川沢の地図等今回の紀行でほぼ完成致しました、帰京の節は及ばず乍ら御手伝も致す積り、それ迄御苦労乍らよろしく御願申上げます、今度は大学も論文事件で休講等多かれと祈って居ります（?）

天候安定致さば又帰京の途路、双六谷から千丈沢、高瀬下り等致したく思って居ります、十五日前後には帰京致します、では皆によろしく、末筆乍ら貴君一家の御精栄を祈る。

啓具

（註）同封記録は『針葉樹』八号二一二頁所収のカクネ里生活をいう。論文事件は杉村広蔵教授の事件かと思う。『針葉樹』八号編集最中の手紙である。洲崎氏は彼の義兄。

昭和11年11月富士山での小谷部君（望月）

○昭和十一年三月二日付　品川区大井元芝町八四九より（ハガキ）

御無沙汰失礼、御機嫌如何、あれ以来小生専らバットレスを目指して準備して居りましたが、肝甚なハーケンが求められず（好日山荘当分営業中止）止むなく中止です、でも過ぐる冬の激しい想出を紫煙をくゆらし乍ら追想するのも悪くないと思いまして、唯スキーの向く儘に南の三月を味ひに行きます。予科

生は野沢へは九日午后一〇・五五上野発列車の最前部車輛に陣取る筈で大勢参ります。僕はいくらか遅れるかも知れませんから、成可く一緒に行って、最初からビシビシ指導してやって下さいませんか、尚合宿責任者は佐々木、事務会計は原が担当するさうです、では取急いでおりますから失敬します、いづれ合宿で、

○昭和十一年三月二十四日付　西宮市外甲東村神呪、洲崎方より（封書）

前略　合宿よりお便りもせず本当に失礼しました、もう森脇あたりから御承知と思ひますが君のお便りは解散後木曽御嶽で彼から手に入りましたのです。

去年の三月もくさったが、今年の三月程一橋山岳部の否商大気質の軟弱さ、不信な行為等にくさった事はありませんでした、それこそ浦松さんの口ぶりではありませんが、登山と言ふ一つの芸に這入る以上、今少しの熱意と覚悟が必要ではないかと思ふのです、突然かう言はれては君も一寸見当がつかぬ事と思ひます、が兎も角、薄弱児童の寄り集りみたいな現状を、少しでも打破向上させなければならぬ事は、僕達の最も力を強く入れねばならぬ仕事の一つだと思ふのです、僕が殊更今度感じた委細はいづれ面談致します。

扨予定の如く三月の三日一人で新宿を発ちました、ザイルやハーケン等一切持って来ないとは云へ、例の重いスキーや防寒具等で意外に思ふ程の荷です、四日一人なのでハイヤーも傭へず、三時間も空バスで眠ったり馬鹿らしい位時間を無駄にした上、有野でほうり出されてトボトボと長い旅の一歩を踏み出しました、それから一週間にわたるスキーの旅をして信州へ抜けたのですが、あんなに印象深い山旅をしたのは始めてゞした、雪深い夜叉神峠、野呂川沿ひの雪景色、なつかしい白根御池の小舎へ食料補給にもぐり込んだ事、大樺沢の素的な滑降、辛い零下十数度の朝徒渉を繰返した事、腰迄ぬらして岩蔭でビバークさせられたり、雪橋を踏破って危く深淵墜落を片手で免れた事、高廻りの辛さ等々、それから仙丈岳頂上からの眺望も忘れられません、北沢峠から伊那へ出る途は、始めてゞ心配して居たのでしたが、カンの一手で原始林を抜け出す事が出来ました、一人の南アルプスの旅こそ本当に山男のよき試練であり、又十分なる満足を与へてくれるものです。

それから野沢へ廻り更に立山へ行く積りでしたが、パートナーの一方的約束破棄（？）からすっかり手違ひを生じて、すっかりくさり、佐々木と二人木曽御嶽へ行きました処、佐々木一人で遊びに出したのが悪かったのですが、九合目附近でスリップして片目の上マブタを切り、相当ひどい傷を負って了ひました、直ちに下山させ、ソリとハイヤーで木曽福島へ出し、仮手当を加えて帰京させましたが、その為又々予定を狂はせ、翌日六合目へ引返して荷をまとめ、頂上も踏まずくさって大阪に来た次第です。若し出来ましたら、一寸佐々木の処へ見舞に行って下されたら、彼も喜ぶ事と存じます、彼も当分山へは行けなくなるだろうと思ひます。

この事件で考へたのですが、結局アイゼンテクニックの練習不足に原因すると言ふ事が出来る以上、今少し僕達の合宿のやり方を変

えなくてはならない事になります、当人の練習如何によるとは言ふものの、昔と違って冬山が常識となった今日の大学山岳部で、あんな温泉スキー合宿は全然意味ないものなのです、最初からスキー、ワカン、アイゼン等々平行して練習すべきであると言ふ風に僕の考も変りました、従って合宿を現在の様な冬山を知らぬ予科生に委すのも、大きな間違だったのでした、この点考へて次年度からは断然改革したいと思って居りますが如何でせう、いづれ集ってよく相談したいと思ひます、苦しい修行や辛い努力からの逃避たる所謂静観派は、断然現今の山岳部には有害なるものである事に気付きました。さう云ふ思想が恥ずべき遭難を起す事は、僕達身近かに見て来て居りますから。

即ちその為には大学山岳部の特殊な地位を明らかにして、具体的にも進歩の方向をはっきりさせる様にしむける事です。矢張り強制も或程度必要となるのは止むを得ぬ勢でせうし、それが為所謂気分を害ふと言ふのは、どこかに引け目を感じて居る逃避者の心配なのではないでせうか、そしてそれで気分を害ふ様な者も結局逃避者であり、部員としての自覚の薄いものなのではないかと思ふのです、馬場さんではないが、急に四月から改革強制と騒ぎ出す事は、どうかと思ひますから、いづれよく相談の上徐々に導いて行かうではありませんか、堀岡さん時代の山岳部は、もう既に一昔前の存在です、今時あんな状態では大学山岳部の存在価値零でせう。くさって居るに委せて、とりとめもない事を書なぐりましたが、何れ冷静によく話し合ひませう、では内外非常時の折柄、君の御自愛を祈ります。

末筆乍ら御令息様奥さんの御健康を祈ります。

○昭和十一年三月三十日付　西宮市外甲東村

神呪、洲崎方より（ハガキ）

針葉樹会報有難う、こちらはまるで東京と違った関西風ですから、かう云ふものが塊らなく嬉しく思はれます、湯田坂は気の毒でしたね、君にも色々面倒臭い事ばかりおんぶさせて済みません、実際佐々木の事件もあったので、東京へ直接帰る積りでしたが、金の都合でこちらに来て了ったのですが、来て見れば矢張り方々に義理もあって、直ぐ帰る訳にも行きません、四月の中旬前には帰京する積りです、では一寸御礼迄

○昭和十一年八月三十日付　西宮市外甲東村

神呪松籟荘、洲崎方より（ハガキ）

先般は勿卒の際とて失礼致しました、都会、海等すべて水平線の交錯で、この残暑でつくづく山恋しの情に駆られて居ます、扨小生の靴ずれ未だなほらぬ為、今回はあまり無理は出来ませんが、左の様に御池小舎入りする積りです。九月一日夜大阪発、二日伊那大島－鹿塩湯泊、三日鹿塩湯－三伏峠小舎、四日三伏峠－白根御池小舎、尚御池小舎滞在及其後の小生の食糧（米を除く一切）は、貴兄の方で御持参願ます、では元気でお目に掛りませう。

○昭和十一年十月三十一日付　品川区大井元芝町八四九から（ハガキ）

前略　今夜から森川と二人で三峠へ行く、主としてハーケン技術の実地研究と練習をみっしりやって来ます、若し富士がよかったら、

ついでに登って来るから帰京は三日か四日になる予定、二日の集会に一年坊主が来たら冬の話でもやって下さい、尚今日片桐へ寄り冬山天幕を頼みました、優に五人収容し得る総二重張流線型の堂々たる奴です、充分御信頼下さいと言ふ奴です、一寸お知せ迄。

○昭和十二年六月二日付　西宮市外甲東村松籟荘、洲崎方より（ハガキ）

御便り有難う、新緑の南アルプス嘸よかったでせう、大塚、日江井も段々軌道に乗って来た様ですね、小生大阪へでも来たら落付いて書けると思ったのですが、何しろ天下に冠たる灘の生一本と来ては、気が散って困ります、だが「北岳バットレス」は殆んど出来上りました、地図を作り地名の統一等をして、完成するのはどうしても十日頃になりませう、貴兄や森脇にも一寸筆を入れて貰はねばならぬ所がありますし。結局皆小生の怠慢の為ですから、夏は私だけ少し東京に残って針葉樹の残務を始末し、出来次第剣の合宿へ馳せ参じようと覚悟して居ります、当方の広告四件程あたりましたが、縁故なしでは全然望み薄です、でも出来るだけ廻って見ませう、尚十合氏は唯今京都に居るさうですから、至急貴兄から芦屋の宅へでも出して下さい、小生帰京八日夜頃、天幕注文頼む。

（註）『針葉樹』第九号編集中のもの。

○昭和十二年六月七日消印　西宮市外甲東村松籟荘、洲崎方より（封書）

前略　六月四日付御書面拝見、この際全く仰せの如く発刊遅延はせぬ方が宜しいと存じ、大体貴兄の御考へ通りにする以外ないと思ひます、尚見積りは原稿全部揃はなくとも、発行部数は既知ですし、大抵一〇〇頁から二〇〇頁と言ふ見当はつくのですから、その程度に於て組代、紙代、写真、地図等個別の単価を精密に出させれば好いのですから、右の如くして他の二、三印刷屋へ当って、単価による見積りをとって参考とし、然る后貴兄の御存じの方へ頼むなり、他へ頼むなりした方が最善と存じます、尤も他の印刷屋へは後で交渉して見て比較し、若しコストに於て不当なれば価引させる位の事を、印刷当事者に示し置く程度で結構でせう。記録は早速別便で御送りしました。御加筆願ふ所は鉛筆で記してあります、広告は五件程交渉しましたが、留守中か、縁故関係以外お断りかで、全然関西は駄目です、大阪弁の商人には刃が立ちません、たゞしドンちゃんからの世話で高島屋は取れ（以下便箋二枚目亡失）

（註）『針葉樹』第九号編集印刷の頃のもの。

○昭和十二年十二月二十三日　沢渡にて（ハガキ）

前略　その後御祖父様如何、貴兄の不参加最終年度でもあり一同落胆しました、天候は十八日以後毎日降雪で、先発隊は徳沢迄順調に入りましたが、翌二十日無理して降雪中、奥又白ルンゼを荷上に登った他、全員可なりの一次表層雪崩に遭遇。森川は全く埋没されたさうですが、幸ひ偶然埋没を免れた他の四名に発見され、全然無事なるを得ましたが、唯日江井は腕を完全骨折しました、その為二十一日は横本を除く森川、船木、大塚で中ノ湯迄日江井を送って参り、その日は後発隊と共に一泊、二十二日再び徳沢へ一同と共に上り、小生のみ日江井を松本迄送り仮手当をし

て帰京させました、小生は鷹野を呼んだりして松本泊、翌二十三日一気に徳沢へ上る積り。合宿は大体徳沢を主として、残留班のみ天幕生活して壁をやる積りです、何れ又出来たら詳細御便りします、では又。

○昭和十三年四月二日付　大阪市東区備後町三丁目十九　洲崎方より（ハガキ）

先日は態々御見送り有難う、漸く新住所に落付き四日からの出社を待って居ります、貴兄も既にお勤めの事と存じます、拙船本、森川は其後如何ですか、何れ見舞の手紙でも書く積りですが、傷の程度等詳しくお知らせ願い度いと存じます、一生生れもつかぬ不具にでもなったら、吾々としても及ばず乍ら何とか慰安の方法を講じなければならぬと思ふのですが、山ならぬビル務めのこれからは、お互に体丈は丈夫にしてゆかう。

（以下次号に続く）